



2歳からのエコノミスト

京都府・同志社女子高等学校 1年 藤井 満里奈

「お金を稼ぐ」及び「利益を得る」ということについての私の体験を通して、お金の大切さを考えてみることにする。

我が家には一般的な定額制のお小遣い制度はなく、家庭内において自分の力で稼がなければならないのだ。もちろん学校に必要な文具代、書籍代、食費及び被服費などの必要経費は親が負担してくれているが、自分の趣味のコミックや、ゲーム、及び友人と遊びに行った際の交通費や食費等は自分のお金でまかなうのだ。この制度はアルバイトができる大学生になるまで継続されるようだ。母の考える『働かざる者食うべからず』に従って、どんなに幼くてもその年齢に応じて、誰かのために何か行動し、対価を得るという経済観念を知らず知らずのうちに持つこととなったのだ。

そもそも、私の兄が4歳、私が2歳の時、母が『Fマネー』なる家庭内通貨制度を作ったことから始まったのだ。最初は私たちがお手伝いをして『Fマネー』をもらい、家の一角で駄菓子コーナーが設けてあり、そこでその通貨でお菓子を好きな時にいつでも買うことができるシステムだった。そのうち判断能力やニーズに合わせて、進化を遂げていくことになる。そして最終的に取まったスタイルは、家族一人一人が自分の考えた店を運営し、家庭内で家族を対象に行う売買に『Fマネー』を利用したのである。また『Fマネー』は、おはじきや色画用紙を用いており、『1F』は日本円に換算すると、1円になる。そして、この『Fマネー』は、『ママ銀行』で日本円に換金してくれる。『10F』から換金可能だ。その日本円で商品を仕入れたり、自分の欲しい物を買ったりするのだ。これがいわゆるお小遣いということになる。

具体的には、兄がジュースなどの飲料水や自分で描いた絵や工作したものを販売し、母は銀行と駄菓子屋を運営していた。父は当時流行していたポケモングッズを扱っていた。しかし父は仕事が忙しかったので、事実上母が代理で経





営していた。そして最初私は兄の真似をして、ジュースを売っていた。しかし案の定兄の売り込みが優れていたため、私の店の売れ行きは悪かった。幼くても売れなかったことが悲しかったことを今でも覚えている。私はどうしたらいいかわからず、母に相談した。すると母は

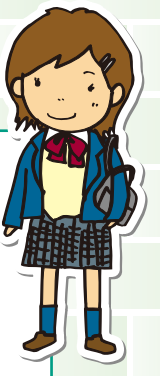
「お兄ちゃんとは違うことをしたらどう？」

と答えてくれました。今思えば、小さい時の方が発想豊かで柔軟だったのか、すぐさまアイデアが浮かんだ。缶ジュースにキラキラシールを貼り、『安くて、おいしい』等とうたい文句を書いたポスターを作り、両親に一日何度も売り込んだ。特に父は私を不憫^{ふびん}に思ったのか、必要もないのに何本も買ってくれた。そんな中、父をターゲットにすることを思いついた。そして父の好きなコーヒーを仕入れ、『肩たたき券』をセットし、少し高い値段設定で売ってみた。当時は父が喜んで購入してくれていたように思えたが、今思い返せば、きっと苦笑いしながら私に付き合ってくれた様子が想像できる。このあたりが家族ならではのご愛嬌というものだろう。

ある夏休み、偶然スーパーでミニ自動販売機冷蔵庫を見つけた。私たち兄弟にとって本格的な店にできると思い、兄と共同出資で自動販売機を利用したお店を作ることにした。ミニ自販機の購入費も、仕入れも、利益も、そして帳簿や在庫管理などすべて兄と折半することでスタートした。しかし共同経営は責任の所在があいまいとなり、会計を担当していた兄の計算ミスにより、利益がたったの15円しかなかった。そこで共同で何かをすることの難しさを初めて知ったのだ。それ以来自己管理し自己責任の道を選ぶことにした。

このような経験は、中学受験のための塾に通うまでの小3まで続いた。以後、お店を持たなくなった私の収入は成績に対して支払われることになった。これは成績をよくするためのお小遣いという考えではない。自分が家族貢献したことに対する報酬ということである。例えば成績が悪いと家庭教師や塾を増やすことになり、教育費がかさむことになる。そこで経費を余分にかけずに勉強することは家族貢献したということになるのだ。そして中学から念願の私立に通っているが、そこでもまた成績による小遣い制度は変わっていない。このような制度は両親からの一方的なものではない。その都度話し合っているため、金額などの条件面ではしっかり交渉して自分を守らないといけないのだ。





一風変わった経済観念が発達した私は、中学3年からの公民、特に経済的な分野にとっても興味がある。先に述べた制度以外に、小学生の頃から株式や投信を母と兄と一緒にアイデアを出しながら購入し、その後の推移を日経平均や為替とともに観察していたので、少しではあるが経済用語や仕組みを実感し、理解を深めることができたので公民の時間は有意義に感じる。

またこの感覚は街へ出た時にも発揮される。例えば最近行った祇園祭では、屋台で売っているたいして冷えていない500ミリリットル以下のジュースが300円ととても高く、のどが渴いていたが、どうしても買う気にはなれず、コンビニを探し歩いて、定価の148円で飲み物を買った時の満足感は兄ぐらいにしか伝わらなかった。常に仕入れ、サービスなどの付加価値、売価などの価値観を私なりに持っていて、行動できたことを改めて感じさせる出来事であった。

日本ではお金に対する教育が遅れていると思う。きれいごとのお金ではなく、生きるためのアイテムとしてのお金の仕組み、利益を得ることの意味を低学年から教えるべきだと思う。危険が潜んでいるからと携帯電話を子供から離すという考えではなく、危険だからこそ大人のサポートを受けながら、共存することが必要なのだ。大学生か社会人になってから詐欺に遭わないためにも、経済観念を育てる教育が急務だと思う。

このような経験をした私が公民などの授業から社会の仕組みを少しずつ垣間見るようになって、社会的に経済的義務を課せられていない高校生であるからこそ感じることもある。それは、自分の懐が潤っていても周りの人たちが貧しかったらきっとその社会は崩壊への道をたどることになるだろう。だから自分の利益だけではなく、それ自体が与える周りの人への影響についても考えるべきだ。さらに目先の利益だけではなく、長期スパンで利益を考える必要も同時にあるということだ。

最後に世界の至る所で貧困に苦しんでいる子供たちの様子をテレビ等で知ると、私たちの経済観念とはあくまで先進国主体のものであると感じる。これを遂行しているだけでは貧困は終わらないと思う。自分のための利益から世界の利益を考える経済学が世界中に広まることを願いたいと思う。

